

EVANGELICAL THEOLOGY

50

December, 2019

Mission

Editors

S. Sakai, H. Minamino, T. Oba, K. Yamazaki-Ransom, H. Hiratsuka

CONTENTS

Foreword	Sumito Sakai
Featured Articles	
Theological Education from a Missiological Perspective:	
Some Initial Observations	Motoaki Shinohara
Becoming a Missional Church:	
Towards the Formation of an Authentic Community	Takao Sugi
Rediscovering the Richness of Evangelistic Mission	
from the Perspective of Diakonia	Stephan Van der Watt
World Missions by the Korean Church:	
Past, Present, and Future Perspectives	Eiko Takamizawa
Article	
Identifying the Background to the Epistle to the Galatians:	
Collectivistic and Apocalyptic Worldviews	Kenichi Manabe
Members' Achievement Records	

Published by

The Japan Evangelical Theological Society

福音主義神学

50

2019.12

宣教

目 次

巻頭言	坂井純人
論文	
宣教の神学から考える神学教育 — 序論的考察 —	篠原基章
ミSSIONナル・チャーチを目指して	
— 真正な共同体形成への挑戦 —	杉 貴生
福音宣教の豊かさをディアコニアの視点から再発見する	
..... ステファン・ファン・デア・ヴァット	
韓国教会による世界宣教の過去、現在、将来の展望	高見澤栄子
投稿論文	
ガラテヤ書を読む視点を考える	
— 集団主義的世界観と黙示的世界観 —	眞鍋献一
会員刊行文献目録 (2018 ~ 2019)	
活動報告 (東部・中部・西部・全国)	
論文執筆要項・賛助会員一覧	

日本福音主義神学会

巻頭言

坂井純人

今年も主の恵みと皆様のお祈りに支えられて、福音主義神学誌第 50 号を会員の皆様にお届けすることが許され、心から感謝致します。今号のテーマは、「宣教」です。主御自身の御言葉の啓示が先立ち、主への人格的信仰的応答を通して、神の民が宣教の器とされます。今号では、神の民が真に宣教の器とされるべく、宣教と聖書と教会との有機的関係を包括的に問い直し、神学的に検証しようと努める試みが 4 本の論文によってなされています。いずれも各論者の専門分野からの興味深い洞察ですが、共通して、聖書と教会と神学の関係を「宣教の視点から再検証、再構築していこうとする意欲に満ちた内容となっています。

今号の特色は、多様な角度からのアプローチが取られますが、結果として、いずれもこの取り組みの動機と目標において、「宣教」の本質と實際を問うものとなっていることです。この事実が、世界大の宣教理解において、問題の理解と解決の糸口をつかむ問題意識が、教派を問わず、軌を一にする時代に達していることを意味しているのかも知れません。日本福音主義神学会が、唯一の主と公同の教会に仕える各教会、教派によって、聖書に根差した神学的対話を通して成り立っている点に鑑みる時、今回の各論文のコーディネートは、より包括的な課題と問題意識を共有して、理解することにつなげる一助として、幸いなものであったと感謝しています。

篠原氏の論文は、神学教育の本質を従来の、所謂、4 つの専門領域（聖書学、組織神学、教会史、実践神学）から宣教学や宣教の実践を生み出す視点に再検討を加え、宣教そのものの性質から、各神学分野を見直すよう、大胆な提言を提出しています。また、この課題を専門的教職者のみに限定する傾向から、一般信徒をも含み込んだ「神の民」としての共同体の使命と捉え直す実践を促し、

さらに、神の御言葉である聖書（Word）と世界（World）を結び付ける宣教の神学を再考する重要性を指摘しています。神学校と教会の在り方を改革する一視点としても、貴重な提言と言えます。

杉氏の論文は、宣教的教会共同体の形成を目指す為の宣教上の課題として、現代における、欧米的個人主義の影響と共同体崩壊の危機意識を挙げています。日本的文脈においても伝統的共同体が衰退する中、尚も社会に存在する教会として、いかに真の聖書的共同体形成が可能とされ、教会の実践を通して、回復、形成されるかを問う意欲作です。そこには、新約聖書の使徒の働き 2:42-47 に見られる初代教会の、聖霊によって主導された霊的訓練共同体の姿をスモールグループの形成を通して現代にも適用しようという提言があります。この論文を通して、教会は、地域社会、世界に根差し、福音による神のかたちとしての霊的共同体の形成に仕える使命を神から与えられているとの確信が強く伝わってきます。福音は単に個人主義的に理解されて終始するのではなく、聖霊によるキリストのからだとしての共同体形成を生み出す神の恵みの力だからです。

ファン・デア・ヴァット氏の論文は、福音宣教の在り方の中に、本質的に「ディアコニア」、すなわち、愛をもって仕える働きがあることを教会史、実践神学の視点から、再認識する重要性を論じています。狭義の「執事的働き」の大切さはもとよりですが、教会形成と福音宣教の相互関係において、ケリュグマ、ディアコニア、コイノニア、レイトウルギアのバランスの大切さと共に、主の愛の実践としてのディアコニアが、いかに福音宣教の歴史で用いられてきたかを明らかにしています。さらに、阪神淡路大震災、東日本大震災、九州熊本の震災、西日本他様々な地域で起こった水害等の際に、地域の方々への支援を通じて、キリストにある愛の業を福音の一環として伝えた働きが、神の民の信仰の生きている証し、しるしとして、救いの御業に用いられた事実を指摘しています。さらに、この主張の神学的根拠を「三位一体の神」の世界との関係の証人となる「神の宣教」の召しに従うこととしています。

高見澤氏の論文は、世界有数（アメリカに次ぎ第二位）の宣教師派遣大国と

なった韓国教会の成長と宣教師派遣の歴史をデータを用いて検証している貴重な研究です。かつて、非キリスト教国として、宣教師を受け入れる立場から、世界中に宣教師を送る立場に成長した、アジアにおける稀有の存在である韓国教会の姿から学ぶ点が多いでしょう。さらに、過去から現在までのみならず、世界中に点在して生活している、所謂ディアスポラ（在外同胞）への宣教の取り組みやネット社会での宣教の在り方の現在と将来の課題について論じる点は、日本の教会が世界宣教に仕える上で非常に有益な可能性と視点を示唆していると言えます。

今号には、投稿論文として、眞鍋氏の聖書神学部門の論考を掲載することが出来ました。この論考は、ガラテヤ書簡を集団的世界観と黙示的世界観を通して再読する視点を紹介する試みの一つです。投稿論文は、投稿希望者の所属部会の理事の推薦を得た上で、編集委員の査読審査を経て、掲載されます。今後も若い世代の意欲的な取り組みを期待しています。

宣教を導かれる主の祝福の下、今号の提供する「宣教」の視点が、読者の皆様の聖書の読み方、教会形成、神学の取り組み方への良き励ましとして用いられますなら幸甚です。

日本の教会と福音主義神学会が、主の宣教にさらに御心になってお仕え出来ますよう、心からお祈り申し上げます。また、主の2020年は、全国研究会議が、関西で開催されます。皆様のご参加を心からお待ちしています。

（西部部会理事長、全国編集委員長）